

## グロテスクなイギリス式庭園

—カント美学における醜さ

高木 駿 (一橋大学)

『判断力批判』(1790)冒頭において、カントは、「表象を〔……〕主観の快／不快の感情と関係させることで、或るものが美しいか否かを識別する」(V 203 強調引用者)ことを、対象の美しさを言明する趣味判断の内実として説明した。快の感情に基づく判断が美しさに関する趣味判断となるなら、その反対に、不快の感情に基づく判断は、美しさの反対概念である醜さを言明する判断となるはずである。しかし、カントは、美しさに関する趣味判断の場合とは対照的に、醜さに関する趣味判断を明示的に説明することはなかった。とはいえ、カントは、70年代から90年代まで一貫して、醜さを、美しさの欠如ではなく、それと対をなす積極的な反対概念として捉えていたため(Vgl. XXIV 364; 708)、S・マコーネルやM・キェプレンなどの最近の解釈者は、趣味概念と醜さとに関わる理論が『判断力批判』のうちに隠されていると見ている。かりに趣味によって醜さを判定できない事態となれば、カント美学は、偽を問えない論理学や悪を評価できない倫理学のように、不完全な美学になってしまうだろう。

こうした問題状況をまえに、本発表は、一連の先行研究とともに、趣味判断と醜さとの関係を考察することを目的とするが、先行研究が不快の感情とその根拠に着目するのに対して、「グロテスク」という美的カテゴリーに着目する。「庭園におけるイギリス趣味は、〔……〕構想力の自由をグロテスクに近づくほどまで駆り立てる」(V 242)とカントは言う。当時の「グロテスク grotesk」は、イタリア語の「洞窟風の grottesca」という語源をすでに離れ、「奇怪な」「異様な」という意味で使用され、現在同様、より大きな醜さのカテゴリーに包摂されるか、それに準じるものとして理解されていた。それゆえ、なぜイギリス式庭園はグロテスクさと関係するのかと問うことは、趣味概念と醜さとの関係を解明する確かな導き糸となる。その際に注目すべきが「構想力の自由」である。自由な構想力は、快の感情の生成根拠として美しさの判定にも関わり、趣味による判定にあたってのそのあり方には、美しさに関わる仕方と、グロテスクさないし醜さに関わる仕方とが考えられる。問題は、その区別が何によってなされるのかである。本発表は、カントが実際に参照したE・バーク『崇高と美の観念の起源』(1757)が触れているイギリス式庭園、つまりエピクロス主義的庭園における構想力の役割を踏まえたうえで、その区別を補完的に説明し、イギリス式庭園とグロテスクさとの関係、それゆえに、趣味による醜さの判定のあり方を詳らかにする。